

ネットワークと英語教育

清水 眞¹

1 はじめに

九州工業大学の学生、教職員のみなさんにとって、コンピュータを用いた教授法をCAIと呼ぶのは常識でしょうが、私も情報科学センターのワークステーションネットワークを用いて英語の授業を行っています。とは言うものの、はじめたばかりで、慣れないものですから、ミスは多いし、試行錯誤の連続で、とてもまだ人に紹介できるような段階ではありません。が、センターから何か書けとのご宣託がありました。日頃センターには迷惑をかけっぱなしで、頭の上がない私は、へへーッとかしこまり、キーボードをなめなめ（鉛筆は最近使いませんので）、この文を書いている幸いです。

以下、次のように話を進めたいと思います。まず、2節では、アメリカの語学教育関係の学会のデモンストレーションに協力した際の報告をいたします。3節では、昨年度前期に行った、英文の要約を中心にした授業のことを述べます。4節では、昨年度後期に行った、英文を書くことを中心にした授業の説明を行います。5節では、今後の課題に触れます。

2 アメリカ外国語教育学会デモンストレーション

アメリカ外国語教育学会 (American Council on the Teaching of Foreign Languages) で、ネットワークを用いた外国語教育のデモンストレーションをするので協力してほしい、という要請を受けたのは今年の5月ごろでした。要請者は、Nelsonというアメリカ空軍大学の日本語の先生です。Linguistという言語学のニュースグループで知り合い、電子メールのやりとりをするようになっていた人です。私の英語の受講生と先生の日本語の受講生が、電子メールで文通したこともあります。情報科学センターの全面的な協力を得て、準備が進みました。

¹工学部人文・社会・語学・体育教室, shimizu@hakobera.isct.kyutech.ac.jp

デモンストレーションは、2回行われました。11月21日13:00-13:30（シカゴ時間11月20日22:00-22:30）と11月21日23:30-11月22日00:15（シカゴ時間11月21日08:30-09:45）です。前者は九工大の大学祭のイベントのひとつ、後者はアメリカ外国語教育学会のワークショップでした。1回目のデモンストレーションは、九工大工学部情報科学センターにいる参加者が、アメリカ空軍大学について質問し、ネルソン先生から返事をもらうという形で進行了ました。

```
Return-Path: kohama@isct.kyutech.ac.jp
Received: from hiko.isct.kyutech.ac.jp by hakobera.isct.kyutech.ac.jp (5.65
id AA13676; Sat, 21 Nov 92 13:45:09 +0900
Received: by hiko.isct.kyutech.ac.jp (5.65/6.4J.6)
id AA11340; Sat, 21 Nov 92 13:44:27 +0900
From: Kohama Tetsuya <kohama@isct.kyutech.ac.jp>
Sender: actfl-request@isct.kyutech.ac.jp
Errors-To: actfl-request@isct.kyutech.ac.jp(ML Admin)
Return-Path: <kohama>
Message-Id: <9211210444.AA11327@hiko.isct.kyutech.ac.jp>
To: "Eric W. Nelson" <enelson@gems.usafa.af.mil>
Cc: actfl@isct.kyutech.ac.jp
In-Reply-To: Your message of Fri, 20 Nov 92 21:12:36 -0700.
<199211210412.AA20221@gems.usafa.af.mil>
Date: Sat, 21 Nov 92 13:44:06 +0900
```

>> 九州工業大学の皆様、
>> 今日は、
>> 私は米国空軍士官学校のネルソンです。

はじめまして。
私は九州工業大学工学部設計生産工学科制御コースの
小濱徹也 (tetuya kohama) と申します。
本日はよろしく申し上げます。
ところで、アメリカの空軍士官学校を卒業した生徒さんは
大学卒業扱いになっているのですか？
それとも、何か別の称号が与えられるのでしょうか？
教えて下さい。

小濱
E-mail:kohama@isct.kyutech.ac.jp

図 1: 大学祭でのデモンストレーションの通信例

2回目のデモンストレーションは、シカゴのACTFLの会場から、ネルソン先生が会場の参加者から日本への質問やコメントを求め、日本語で電子メールを送ってきました。いずれのデモンストレーションでも、数分で電子メールが行き来し、同時性が強調されました。

```

Return-Path: actfl-request@isct.kyutech.ac.jp
Received: from hiko.isct.kyutech.ac.jp by hakobera.isct.kyutech.ac.jp (5.65
id AA17238; Sun, 22 Nov 92 00:08:49 +0900
Received: by hiko.isct.kyutech.ac.jp (5.65/6.4J.6)
id AA02371; Sun, 22 Nov 92 00:07:56 +0900
Return-Path: <enelson@gems.usafa.af.mil>
(5.65c/IDA-1.4.4 for actfl@isct.kyutech.ac.jp); Sat, 21 Nov 1992 08:07:33
Date: Sat, 21 Nov 1992 08:07:33 -0700
From: "Eric W. Nelson" <enelson@gems.usafa.af.mil>
Sender: actfl-request@isct.kyutech.ac.jp
Errors-To: actfl-request@isct.kyutech.ac.jp(ML Admin)
Message-Id: <199211211507.AA24889@gems.usafa.af.mil>
To: actfl@isct.kyutech.ac.jp

```

こんにちは。私は池田なおよといひます、ミシガン州で日本語を教えています。
交換教員です。私の高校は、滋賀県の守山女子高校で6年前から通信をしています。

図 2: ACTFL でのデモンストレーションの通信例

あとでネルソン先生から聞いたのですが、シカゴの会場では、語学教育におけるネットワークの可能性について大変白熱した議論が展開したそうです。

3 英文の要約を中心にした授業

この節では、昨年度前期に行った、英文の要約を中心にした授業のことを述べます。授業は1年生3クラスが対象で、受講者数は1クラス約5-60名でした。テキストとして、米国のニュース雑誌 Time を用いました。あらかじめ電子メールで授業で読む記事を指定していますので、受講生は10日前には予習すべき箇所がわかることになっていました。分量は、写真、広告を除外すると、1回あたり約6ページです。全員指定された記事を読んで授業にでることになっていました。1回の授業で6人があたり、ひとり約1ページ、指定された記事を日本語で要約し、2日前までに電子メールで教師に送ることになっていました。教師は送られてきた電子メールをチェックし、内容理解、要約の仕方、訳語の適切性等について、コメントを付け加え、授業の前に alias を設定した同じクラスの受講生全員に送りました。図3に、工大太郎君(複数の例を参照して私が作りました。以下の例も同じです。)の要約とそれに対する私のコメントをあげます。

授業中は、全員がディスプレイ上のふたつのウィンドウに、担当の学生の要約と教師のコメントを表示します。まず、担当の学生の発表、説明がなされ、続いて教師のコメント、質問、訂正、解説が行われます。ここまでお読みになって、「なんだ、実質的にはプリントを

- > 1 : 60 歳になるアンソニーパラカルさんは新聞が好きで、毎朝明け方に 2km
- > 離れたところまで新聞を買いに行きます。

スタイルに注意。敬体（です、ます）でなく、常体（である、だ）で。

- > パラカルさんはいつも投書欄を
- > めくり、自分が出した手紙があるのを見たとき、彼は喜びます。

"he is rarely disappointed"は、「めったに失望しない」
ここで記者が何を言いたいかというと、パラカルはたいてい自分の投書が採用されているのを知るとのこと。

- > 2 : パラカルさんはボンベイの新聞に 38 年間手紙を出し続けています。

「毎日」を忘れない。

- > それは彼の悪い癖です。

addiction 「中毒」を用いるといいでしょう。この段落の 2 行目の epistoholic という単語と関係。記者の造語 (epistle' 「手紙」 + (alco)holic 「アルコール中毒の」)。cf. workaholic
また、vice を「悪い癖」と訳すのは結構ですが、あくまで冗談で言っているということに気をつけて下さい。

- > インドの人々は身分に関係なくあらゆる人が投書欄に自分
good

図 3: 学生の要約と教師のコメント

作って印刷して、学生に配布するのと同じじゃないか」とお考えの方もいらっしゃると思います。批判は謙虚に受け止め、ネットワークでなければできないような語学の授業を目指すつもりですが、このような使い方にもメリットはいくつかあります。まず授業の準備に必要な時間が短縮され、物理的労力が軽減されることです。学生から提出される要約の受渡しでも、レポート用紙だと、教師は研究室に在室しなければならない、学生は研究室まで出向かなければならない、と相互に時間的制約をうけます。電子メールであれば、都合のよい時間に、しかもパソコンでセンターに接続すれば、自宅にいながらでも受渡しができます。それだけ、内容に時間、エネルギーを向けることができるわけです。また、他の学生に配布するにも、印刷の必要がないので、資源、時間、および労力の節約ができます。また、板書に比較すると、教師側は黒板に書く時間がいらぬ、学生側は教室の後ろでも良く字が見える、板書された字を書き写す必要がないので発表者や教師の話しに集中できるという利点があります。

授業のはじめに抜打ちで小テストを行うこともありました。その日に進む範囲をちゃんと読んで来ているかどうか、チェックするためです。記事の内容に関する質問が5問英語でなされ、三者択一の英語の答の中から選択します。比較的平易な英語を用いており、記事に目を通していけば、正答できる問題ですが、成績の1/3がこの小テストで評価されました。この小テストにも電子メールを用いました。全員が用意できたのを確認して電子メールで問題を送ります。全員に着くのに30秒ほどかかります。全員に着いたのを確認して、メールを開けさせます。リプライコマンドで、送信させますが、その時、元の問題をコピーコマンドで写させます。解答するには、三者択一の答のひとつに*をつけるだけでいいので、キーボードによる入力ほとんどいりません。5分後教師側に送らせます。送られたメールはすぐにクラス、日付別のメールのフォルダーに入れ、極端に遅れて送られたものは受け付けないようにしました。図4に例をあげます。

```

From: koudai taro <f99999tk>
Message-Id:<9205270154.AA03405@post.isct.kyutech.ac.jp>
To: mshimizu
Subject: Re: quiz1
In-Reply-To: Your message of Wed, 27 May 92 10:46:51 +0900.
               <9205270146.AA02804@post.isct.kyutech.ac.jp>
Date: Wed, 27 May 92 10:54:44 +0900
(途中省略)
>> Pop Quiz 1>>
>> 1. Who became 80 years old on April 15?
>> *a) Kim Il Sung b) Kim Jong Il c) Kim Yong Sam
>> 2. Who supported Kim during and after World War II?
>> a) Hitler *b) Stalin c) Churchill
>> 3. Compared to 1985, the average Northerner had in 1989;
>> *a) more food b) less food c) the same amount
>> 4. The Seoul government hopes to;
>> a) fight against North Korea
>> b) sacrifice everything for unification
>> *c) delay merger for 20 years or more
>> 5. What is a bad thing about North Korea?
>> a) It is resource poor.
>> b) It is facing a severe labor shortage.
>> *c) The manufacturing and managerial skills are low.

```

図4: 小テスト

4 英文を書くことを中心にした授業

この節では、昨年度後期に行った、英文を書くことを中心にした授業のことを述べます。何故、「英文を書くこと」という用語を用い、「英作文」という用語を用いないかという点、和文を英訳するという、いわゆる従来の英作文とは異なるからです。授業は前期と同じ3クラスで、テキストはイギリスの出版社からでている総合教材を用いました。受講生は前の週に指定された箇所の英文を読み、内容を理解し、設問を考えてくることになっていました。学生は毎回違う相手と任意にペアを組まされ、図5のような電子メールを相互に交します。テキストの設問の解答について、英語で意見を交換するのです。ここでは、「英語を学ぶ」と同時に「英語で何かを行う」ということが意図されています。

```
>> >> >> Which paraguraph did you select at "d"?
>> >> >> I selected "3".
>> >>
>> >> 2-6-5-3-1-7-4
>>
>> This answer is same as me.
>>
>> What do you think about No.8's question?
>> I have no idea about this.
>>

"What is Harry going to do for Ruth's sister ?"

I have no idea,too.

- - -Vocabulary-
1-f 2-i 3-h 4-d 5-l 6-c 7-b 8-a 9-j 10-e 11-k 12-g

Is your answer is the same as mine ?
```

図 5: 電子メールでのやりとり

学生が英語で意見を交換している間、教師からテキスト中の字句についての質問がやはり英語でなされますので、学生は英語で返答しなければなりません。

このテキストには、英文で手紙を書くセクションもありましたので、そこも活用しました。はじめは、自分の名前や住所等、簡単なものを置き換えるだけでしたが、後には、だんだんと長い句を自分で考えなければならなくなるようになっていきます。

From: koudai tarou <i9999tk>
 Message-Id: <9302010417.AA05903@post.isct.kyutech.ac.jp>
 To: mshimizu
 Subject: Re: Answer my question!
 Date: Mon, 01 Feb 93 13:17:26 +0900

>>Tell me what 'child prodigy' means in the 1st line of the 1st paragraph.

It means 'a child of genius'. In Japanese it is 'sindou, tensaiji'.

図 6: 字句に関する質問とその答え

3クラスのうちの1クラスは、電子メールを用いて海外の学生と文通しました。相手は、九工大の姉妹校、オールド・ドミニオン大学の修士課程の学生二人です。英語教育が専門のJanet Bing先生が指導する学生で、Bing先生は、同校から九工大に英語を教授しにいらっしゃっているラブラート先生にご紹介頂きました。図7に工大花子さんの例と、それに対するDeniseさんの返事をあげます。

5 今後の課題

学生にこの授業を評価させるため、後期の最後にアンケートを実施し、最終的な受講者総数151名中、135名から回答を得ました。以下、そのアンケートの結果をもとに今後の課題をあげてみたいと思います。

まず、最初の問題は、19名の受講生が言及しているように、ワークステーションの操作法です。3クラス中2クラスは、この英語の授業のオリエンテーション以前に情報処理の授業を受けていたので、ワークステーションの操作に関しては比較的問題なかったのですが、1クラスはまだ受けていなかったため、キーボードの説明からはじめねばなりませんでした。情報工学概論、演習の担当教官との事前の打ち合わせ等が必要かもしれません。受講生には、情報科学センター利用の手引きをよく読み、あき時間にはセンターで使い方を練習しておくよう指導しましたが、はじめは相当なとまどいがあったようです。熱心な学生、ワークステーションを多用する学科の学生は、数週で慣れたみたいですが、ワークステーションをあまり使わない学科の、ワークステーションに興味のない学生は、1年経ってもトラブルを起こしていました。この問題は私自身にもあてはまります。前述の学生からの要約ですが、無知だったので、他の受講生への転送を手作業でやっていました。

From: Denise Balason <DVB100G@oduvm.cc.odu.edu>
Subject: Re: mail
To: koudai hanako <z99999hk@post.isct.kyutech.ac.jp>
In-Reply-To: Your message of Tue, 01 Dec 92 15:31:32 +0900

On Tue, 01 Dec 92 15:31:32 +0900 you said:
>Because I don't study very hard, it seems I have to take
>the same classes again!
>But fish of Japanese is small, (How about your place?) so I want to go
>Australia to catch big fish.

Hello! Thank you for your e-mail. As for the fish here, they are pretty big. I really like salmon and halibut, but they are not found here in Virginia. I lived in Alaska for a year and there were many fish there. (I would also love to go to Australia! I would like to go surfing there, not fishing!)

Your English is pretty good. I only have a few suggestions. Be careful not to connect to complete sentences with a comma. (Use either a connective word, or use periods to separate them.) Also, be sure to remember that a word like fish is also plural, so you would need to use "are big" instead of "is big."

I wish I could speak Japanese like you can speak English! Keep up the good work and happy holidays!

Denise

図 7: 電子メールによる文通

後になって、レポート自動受取システムの存在を知りました。どのような機能があるのか、コマンドはどう用いるのか、もっと知る必要があると感じました。ディスプレイには、授業中板書する必要がない、教室のうしろでもよく字が見える、板書された字を書き写す必要がないので発表者や教師の話に集中できる、という利点がありますが、黒板と違い指し示すことができないので、説明が困難になる場合があるという欠点もあります。この問題は、現在情報処理センターでソフトウェアが開発されてるので、近いうちに解決される見込みです。また、9名の受講生が指摘しているように、グラフィクスやゲーム等、この授業に関係のないソフトウェアで遊んでいる学生、日本語の電子メールで友人と「私語」をしている学生がいました。学生側のディスプレイをモニターする方法が必要です。MacのTimbuktuのようなソフトをセンターに開発してもらえたら、と願っています。また、前述の小テストの採点を自動的にやってくれるソフトウェアがあればなあ、とも思っています。ぜいたく言うな、とセンターからはしかられるかもしれませんが。

教材ですが、Timeという非常にむずかしいものを選びました。ワークステーションネットワークという未知の環境にはじめて接する1年生には、それでなくともむずかしい教材だったのではないかと授業が始まってから反省したのですが、アンケートでは意外に好評でした。「おもしろかった」、「難しかったが、よかった」という感想が寄せられました。むしろ、後期に用いた教科書の方が、「内容が簡単すぎた」、「つまらなかった」等と不評でした。前期と後期、テキストを用いる順序が逆だったらよかったかもしれません。今後、どのような内容、形式のものを、どのように用いたらネットワークを用いた英語の授業に適切か、検討を重ねていきたいと思っています。

授業の行い方にも、検討の余地が少なからずあります。前期の授業では、あつた学生、コメントをする教師ともに、授業前の準備に多大の時間を割いたのはいいのですが、いきおい授業中に時間を持て余すということが何回かありました。後期、ペアを組ませて電子メールのやりとりをさせましたが、あれは電子メールではなく、talkのほうがよかったのではという指摘がアンケートの中にありました。検討に値する意見だと思います。前期、後期の両方にあてはまることですが、予習をしてこなかった学生には退屈な授業だったようです。グラフィクスやゲーム等のソフトウェアで遊んでいる学生、日本語の電子メールで友人と「私語」をしている学生は、予習をしてこなかった学生に多かったみたいです。そのような学生は放っておけばよいという議論もあるでしょうが、予習をしてこなかった学生もある程度は興味を持って、参加でき、なんらか得るところがあるような授業ができるのが理想だろうと思います。いずれにしても、改善を重ねて行かなければならないでしょう。

6 おわりに

以上、情報科学センターのワークステーションネットワークを用いた英語の授業について報告いたしました。私個人の授業はまだまだ解決すべき問題が山積みですが、ワークステーションネットワークを用いた教育自体には、とても大きな可能性があるのではないかという気がします。これからその可能性を探っていきたいと思います。たくさんの人にお世話になりました。適切なアドバイスを下さった情報科学センターの教職員諸氏、献身的に協力してくれた補佐員諸君、授業の不手際、機械の操作ミスにも辛抱強くつきあってくれた私の英語の授業の受講生、そんなみなさんひとりひとりに、熱烈な感謝のキスを送りつつ（え？おじさんのキスなんていないよ?）、文書ファイルを閉じます。（キーボードは持ち上げないから置けないので。）